



株式会社 原田青果
代表取締役

原田 安則

農業に携わる人材の減少に歯止めがかからない昨今。

原田社長はそんな状況に危機感を抱き、農業を魅力ある仕事にするべく奮闘している。

自治体や地元企業と連携した付加価値のある商品づくりは、その一環だ。

農業に興味を抱き、若い農業者が増えれば、地域産業も活性化していく——。

社長が見据えるのは、良い循環を作り出すこと。

これからも農業の可能性を追求し、地域の明るい未来を切り拓いていく。

**「これからも農業の可能性を追求し、
地域の明るい未来を切り拓いていきたい」**



農業を魅力ある仕事にすることで 後継者を育て、地域産業の活性化に寄与

しょうがやらっきょうをはじめ、サトイモ、さつまいも、キャベツ、にんじんといった野菜の生産・販売などを手掛ける『原田青果』。同社の原田社長は、これまでのキャリアで培った人脈を活かし、国内外へ農産物を発信することで、地域の農業を守りたいと日々奔走している。本日はそんな社長のもとを俳優の大沢樹生氏が訪問。社長が事業にける熱き想いに迫った。

——早速ですが、原田社長のこれまでの歩みからお聞かせ下さい。

宮崎県で生まれ育ちました。学業修了後は都城市にある薬品会社に就職。そちらで5年ほどキャリアを蓄積した後、自治体が運営する社会福祉協議会に移り、福祉施設の職員として利用者さんのサポートを行っていたんです。それから、ご縁に恵まれた人を頼ってルーマニアに渡り、4年半ほど現地と日本を行ったり来たりという生活を送っていました。そんな中、畜産業を手掛ける父が怪我をしたという知らせを受けて帰国することになりました。

——それは社長自身が農業の道に進まれることを決意された上での帰国だったのでしょうか。

いえいえ。小さいころから父の背中を見て育ち、家業を手伝わされることもありましたが、あまり良い思い出がありませんでした（苦笑）。ですから、当時は父の後を継ぐつもりはありませんでしたし、農業に携わることも考えていなかったんです。けれども家業とは関係なく、昔からのご縁がきっかけで農業機械などの製造・販売を手掛ける大手企業に就職することになりました。

——そこから農業との関わりができたというわけですね。

はい。農業をするための修業のつもりで勤めていました。そちらで3年ほど勉強させていただき、次は大手の青果会社に移って、ようやく本格的に野菜づくりをスタートしました。



株式会社 原田青果

宮崎県北諸県郡三股町五本松 16-3

——青果会社に移られたきっかけとは何だったのでしょうか。

前勤務先に勤めている時、地元の農家さんや青果関係の会社とのつながりがたくさんありましてね。その中で、「野菜を作っているけれど、上手くいかないから来てほしい」という声をいただいて、移ることになったんです。

——農業には携わりたくないというお気持ちを持っていらっしゃいましたが、携わるうちに心境の変化があった、ということでしょうか。

そうですね。農業は自然相手の仕事ですから思うようにいかないことが多い。それでも、愛情を込めて一生懸命育てたものを収穫できた時の感動は大きいですし、経験を重ねることで「自分にもできるんだ」という自信も生まれてきました。そして、農業は難しいからこそ面白い——そう思えるようになったんです。その後、肥料の製造を手掛ける会社に勤務して、2012年に独立しました。そして1年ほど前に法人化して、現在に至っています。

——『原田青果』さんでは具体的にどんな事業を手掛けておられて？

自社で農作物の生産も行いますし、地元の生産者さんの農作物の管理と販売も行っています。その中でも特に力を入れているのが、しょうがやらっきょうですね。地元の代表的な農産物の一つがしょうがなのですが、しょうがは育てるのが難しいと言われることが多いんです。私はしょうがの主要産地である高知や熊本、指導員の方とつながりがあり、肥料会社に勤務していた時から、その方に指導してもらってまして。安心・安全で美

味いしょうがづくりのノウハウを確立しており、当社の主力商品になっているんです。現在は関東を中心に全国に出荷していますし、ゆくゆくは海外にも輸出したいと思っているんですよ。

——らっきょうと言えば鳥取のイメージが強いですが、宮崎も一大産地だそうですね。

ええ。県内では都城のらっきょうが有名ですが、生産量としてはこちら三股町が一番多いんです。ただ、言葉は悪いですが、しょうがにしても、らっきょうにしても、南九州の野菜は安く買われて関東に持って行かれることが多い。丹精込めて生産しても、安く買い叩かれることになりかねません。だから若い人にとって魅力がない仕事になり、後継者が育たないことの要因にもつながっているんです。

——なるほど。それは悪循環だ……。

私共はそこを根底から覆すべく、まずはしょうがづくりからはじめたんです。より良いものを作ろうと力を入れていくうちに、評価していただけるようになってきました。徐々に価格も上昇してきたので、今度はらっきょうの番。実はらっきょうの場合はあまり売れなくなって価格が下がり、撤退してしまう生産者もいるんです。そこで、かたちを変えて売ることができれば、付加価値も付いて価格上昇につながるのではと、今は色々な取り組みを行っているところなんです。



代表取締役
原田 安則

——高く売れば農家さんも生産を続けられるというわけですね。

おっしゃる通りです。これからは、一人でも多くの若い担い手を育成することが急務。そのために、農業をもっと魅力ある仕事にしたいといけません。そして後継者が育てば、地域の産業がもっと活性化していく——そうした良い循環をつくっていかねばと考えており、役場や地場の企業の協力も得て、新たな商品づくりにも着手しました。スタートして8年ぐらいなので、まだまだこれからというところですが、国内だけでなく海外にも目を向けて取り組んでいきたいと考えています。

——最後に改めて、今後の展望をお聞かせ下さい。

事業を通じて三股町の農産物の魅力を広く発信していきたいです。そして、子どもたちに受け継いでもらえるような土壌をつくっていくことが夢ですね。

(2020年10月取材)

Pick up the story

同じベクトルを向いて邁進



俳優
大沢 樹生

「らっきょうは酸っぱいものや、ピリ辛味がメジャーですが、『原田青果』さんでは甘いらっきょうを開発して、海外で販売することをお考えだそうです。韓国ではよくらっきょうを食べられるそうですし、需要はかなりありそうですね。原田社長の試みが成功し、地元の農家さんたちが作られた農産物が国内外に広がっていくことを楽しみにしています！」

大沢 樹生・談

▼現在は原田社長を含め、3人という少数精鋭で日々の業務に取り組んでいる『原田青果』。社長は「これまで様々な仕事に携わってきて、その中で築いてきた人脈が財産です。自分を育ててくれた人、支えてくれた人。そして、今一緒に仕事をしていただいている従業員も、とても大切な存在」だと語る。経理部長の松元あゆみさんに、そんな社長のお人柄を伺ってみた。「社長は何でもやりたいようにさせて下さる方。『こうすればどうでしょう』というご提案をさせていただいても、真剣に耳を傾けてくれますし、だからこそ何でも言いやすい。とても働きやすい環境」だという。社長も「松元部長には無理ばかり言っていますが、海外への輸出についても色々調べて動いてくれてとても頼りになる存在」だと語る。また、社長の中学・高校時代の後輩であり、地元の建設会社の代表を務める中川社長のバックアップも大きいのだとか。皆で心をついに、国内外への商品の発信という大きな目標に向かって邁進している。